

## 朝鮮での遍歴と苦労

茨城県 平戸 敬一

まえおき

私も、はや七十四歳になった。まだまだ気持ちの上では若いつもりではいるが、高齢者の仲間入りの年ごろ、友人の中でも故障者が出始めている。そんな中で「羅津若草会（北朝鮮の羅津国民学校の同窓会）」の代表世話役福地氏から、終戦時外地に住んでいた人たちの苦労した体験談などを記録して残し、戦争の悲惨さを後世の日本人に知ってもらおうという企画が、独立行政法人平和祈念事業特別基金の事業の一つとして行われており、「平和の礎―海外引揚者が語り継ぐ労苦―」という本がもう第十六巻まで出ているが、だんだん生存者も少なくなってきたので、体験談を綴ってみてはどうだと勧められた。日時などははっきり思いつき出せないところもあるが、敗戦後の苦労、貴重

な体験などは今でもはっきりと記憶に残っているので、拙文ではあるが書いてみることにしたものである。

### 一 出生から引揚げまでの経過

私は昭和六（一九三一）年十一月十三日北朝鮮の元山で生まれ、昭和十三年から南朝鮮の釜山、昭和十六年に北朝鮮の羅津に移り、昭和十八年の秋から新義州に移り住んだ。そして、中学二年で終戦を迎え、苦難の末、昭和二十一年九月三十日に新義州を出発し、平壤（ピョンヤン）、沙里院、鶴硯を経由し、徒歩で三十八度線を越え南朝鮮の開城に着いた。テント村に二週間余り収容され、その後京城（ソウル）を経由し、仁川港から船で昭和二十一年十月十九日佐世保の南風崎に着き、待望の日本本土帰還を果たした。

以上が私の出生から日本本土へ帰り着くまでの概要であるが、以下これを詳しく記述し、読んで頂くことによって、今後の平和への礎の一つになればと祈念するものである。

## 二 私の出生と元山の思い出

茨城県水戸市出身の父は、東京高等師範を出ると新潟県の長岡商業学校の教員となり、そこでかの鳩山薫子氏が起こした共立女専を出て、女学校の教員をしていた新潟県出雲崎町出身の母と結婚し、間もなく朝鮮の元山女学校に転任した。母は身重で引越したようだから、そこで私が生まれたのだと思う。余談だが、私の名前の「敬」は父が尊敬していた原敬宰相の「敬」をもらったものだそうだ。

元山で最初に落ち着いた所が泉町で、ここが私の出生地だ。次に、上の妹が生まれた海岸通り、さらに次の妹が生まれた春日町と引越しを重ねたが、だんだんと良い家に移り住んだ。春日町の家は、松濤園という白砂青松の海水浴場に行く途中の坂の上にあったが、門からかなり奥まった所に二階建ての広い家が建っていて、まさにお屋敷という感じだった。もちろん借家である。このあとも含め、都合十二回引越しをしているが、すべて

借家か官舎であり、今考えてみると私や父が引越しを手伝った記憶もなく、その都度母は大変な苦労だったろうとしのばれる。父はこのころから学校のテニス部の部長をやっていたようで、休日に練習のある日には私を学校に連れて行ってくれた。

ある日のこと、待っている間、和装の袴をはいた美しい女の先生が、ピアノを弾きながら私を見てくれたのだが、お昼に頂いた生まれ初めてハムサンドがとてもおいしかったこと、その先生の醸し出す素敵な雰囲気、今でもほのかに覚えている。また、先生方が家に来てよく麻雀をやり、私は父の膝の上で牌を積もってきたり捨てたりした。もちろん父に言われたとおりにやったのだと思うが、そのことも覚えている。母は賞品を揃えたり、お菓子を出したり、日によっては食事を出したりと大変だったと思う。父は当時はほかにゴルフ、弓もやっており、私も父に似たのか、現在、弓、ゴルフ、麻雀を楽しんでいる。

そして私が元山公立小学校に入学して間もなく、

我が家は南朝鮮の釜山に引越した。父が釜山公立東女学校に転任になったからだ。

### 三 釜山での生活と思い出

釜山は日本人が多く住んでいて、当時日本人の小学校は第一から第十まであった。とりあえず落ち着いた家は凡市町の二軒長屋で、近くの第三小学校一年に転入した。翌年釜山港の見える高台にあつて、海水浴場にも近い南富民町のブロック塀に囲まれた門構えの庭のある家に引越すと共に、第六小学校二年に転校した。ここで弟が生まれた。

翌年は昭和十五年で、「奉祝紀元二千六百年」として、日本中が慶祝の行事に沸いた。学校でも、旗行列や記念の学芸会などがあつたのを覚えていゝる。旗行列の途中で「次は何を歌おうか？」と言う担任の先生のリクエストに応じて、私が「日の丸行進曲を歌おう」と言ったら、女の先生だつたが「それは駄目」と言われたのをいまだに覚えていゝるが、しかしその理由が今もって分からない。また、三年生のときの担任の釘宮先生は凶画の先

生であつたが、とても目をかけられた。当時、釜山に進出していた九州の福岡日報という新聞の凶画の懸賞募集に応募し、三位に入賞し、その絵が新聞に載つたり、賞品をもらつたりと楽しいこともあつた。その後、山の手の佐川町という高級住宅街に引越したので、また転校することになつて、前の第三小学校に再転入した。この家では庭に柿・桃・林檎・栗・無花果・葡萄・杏などいろいろな果物の木があり、その時期ごとに味を楽しんだものだった。冬は凧揚げで糸の切り合いをやつて遊んだり、相撲が巡業で来て、<sup>ひいき</sup>にしていた照国関に会えたりと、思い出は尽きない。しかしそれも束の間、四年生の秋、父が羅津公立中学校の教頭に転勤し、私は羅津公立小学校四年に転校した。

### 四 極寒の羅津の生活

羅津は三方を山に囲まれ、一方が海に面した天然の良港で、海軍の基地もあつた。ここでは中学校の官舎に入ったが、当初は二軒長屋の一角、六

人家族にはあまりに狭いので、次いで校庭内にあった元事務棟のようだった、だだっ広い建物に移り、初めてペチカというものに接した。ここで太平洋戦争が始まった直後の十二月十四日に、三番目の妹が生まれた。そろそろ食糧も不足し始めてきて、カボチャやジャガイモの中に米が泳いでいる雑炊や、タンポポの葉っぱや、つくしのお浸し、桔梗の根のキンピラなど工夫の結果の食べ物が多くなった。そんな状況の中で、羅津は松茸の産地だったので、裏山で松茸がたくさん採れ、天ぷらや割いて焼いたのを醤油をつけてたらふく食べたのは、今思うとささやかな至福のときであったと考えられる。スケートを覚えたり、海釣りをしたり、中学校の乗馬部の生徒に馬に乗せてもらったりと楽しいこともたくさんあったが、冬の寒さには閉口した。零下三十度になったこともあり、さらに風速三十メートルの強風が吹き、ひと冬に何軒か屋根を飛ばされたり、あるときは高圧線の鉄塔も折れたことがあった。そうした中を、市郊外

にあった住まいから畑の中の本道（軍用道路）を通って学校へ行くのは、小学生には大変難儀なことだった。そのような日は、道路の脇の低い所を匍匐前進したものだ。それでも五年生のはきは一日も休まず、皆勤賞をもらったが、転校なしの学年はこの年だけだった。

翌昭和十八年の秋、父が新義州公立中学校の教頭として赴任したので、朝鮮最後の地となる新義州に引越すことになった。今でも、この羅津国民学校の同級生とは「若草会」を通じて交流しているが、敗戦当時羅津にいた人たちは、ソ連軍の上陸に遭遇して大変な難儀だったようだ。

##### 五 新義州での敗戦までの生活

私は新義州公立国民学校六年生に転校。当初の住まいは、例によって間に合わせの敏畝洞という町外れの小さな府営住宅だった。ここは、鴨緑江に近く、白魚とか鱈なまず取りを楽しんだ。間もなく、町の中心部の常磐町の、塀に囲まれた広い庭のある家に引越した。すぐ前は法院（裁判所）であ

った。学校では、冬は校庭に土で広い囲いを作り、その中に水をまき一晩置くと立派なスケート場ができ上がり、皆で滑ったものだった。

昭和十九年四月、私は新義州中学の一年生となった。父は地理歴史を教えており、父の授業も受けることになったが、昔気質の厳格な父であり、家では学校のことは全くといっていいほど触れることはなかった。このころは、よく上級生のいわゆる説教（ほとんどが理由なきいじめであった）にあったが、それを父に話すとも無く、また父のあだ名がザボンだったので、以後父は大ザボン、私は子ザボンと言われたが、これについても父と話したことは無かった。ただ幸いなことに、上級生の陰険ないじめについては、並ばせられてビンタを張られるとき「平戸、一歩前へ出ろ」と言われ、素通りさせられたものだった。これくらいが、父の威光によるものだったと思う。成績は、自慢ではないが小学校時代六年間に六回も転校していながら、特に勉強はしなかったが、四年のときを

除いてずっと優等賞をもらっていた。中学入学のときも、特に入試のための勉強はしなかったのにトップで合格し、代表として宣誓書を読ませられたが、中学入学後もさっぱり勉強をしなかったので、成績は急降下、一年生のときに受験した陸軍幼年学校の試験には、見事に落ちてしまった。しかも、このころには食糧不足も著しくなり、授業もほとんど無く、毎日のように勤労奉仕という非常時体制であった。我々一、二年生は、営林署の木材運搬とか、山へ行つての松根採集（飛行機の油にする）、飛行場の掩壕作りを日課とした。雨の日に作業が中止になると、登校し授業を受けたが、たまに映画館行きとなり、主に戦争映画を見せられたものだったが、当時の日常としてはそれがまた数少ない楽しみの一つではあった。

そのとき見た映画で、いまだに記憶に残っているものの一つに、九州臼杵城を舞台にした「小太刀を使う女」というのがあった。珍しく時代劇で、美しい忠義な女性剣士が活躍する内容で、詳しく

は覚えていないが、そのときの主演女優の名前を、当時は美しい人だったなと思うだけだったが、今思い出してみると、山田五十鈴さんだったような気がする。戦争ものでは轟由紀子のファンだった。

営林署には皆彫刻刀を持って行き、休み時間には木材の切れ端で「ゼロ戦」だの「隼」だの、当時の日本の花形戦闘機の模型を上手に作り、出来栄を競い合ったものだった。また、そのとき出されるどんぐりの粉で作った黒パンが、空きっ腹にはとてもおいしく、数少ない楽しみだった。

二年生になって、さて我々も少し威張れるぞと思ったのも束の間、運命の八月は目の前に迫っていたが、もちろん我々は日本が負けるなどとは夢にも思わなかった。空襲警報の知らせで防空壕に退避し、高空を悠然と飛び回る飛行機を敵機と間違えて、「畜生」と歯噛みをしたが、後で日本軍の飛行機と分かりホッとしたり、新義州の飛行場に「疾風」という新型戦闘機が飛来し、頼もしく感じたりしていた。新義州では、実際の空襲は一

度もなかった。ただ、広島や長崎に原子爆弾なるものが落とされたというニュースや（もったも当初心聞で見たときは「ハラコ爆弾とは何だろう」くらいの知識だったが）、八月九日ソ連軍の侵攻においては慌ただしくサイレンが鳴り、戦闘機が飛び交っている情景にただならぬ気配を感じたりしていた。そして、運命の八月十五日がやってきたのだった。

## 六 終戦の日

確か、あれは油蟬の鳴く暑い盛りの晴れた日であったが、正午までに登校しるとの連絡に、夏休み中だった私たちは、この暑いのに何だろうといぶかりながら、母校に三々五々と集まった。それまでの現地の推移から、まさか日本が連合国に無条件降伏をしたとは思わなかった。しかし、天皇陛下の玉音放送を聴き、日本は米英に負けたんだということが、何かひしひしと胸に迫り泣けてきた。クラスの仲間を見回すと、ほとんどの者が悔し涙を流していた。その中でただ一人、机に

顔を伏せ「頭が痛い、頭が痛い」とうめくように繰り返していたのが、朝鮮籍のK君だった。当時は学力が優秀でかつ裕福な家の子弟は、朝鮮籍であっても日本人の中学校に入学することができた。私たちのクラスにも何人かいた。K君の姿が、なぜか今も瞼に焼き付いている。その後、皆とどんな話をしたか、どうやって家に帰って来たか、その晩どんなふうにごったかは記憶にない。

#### 七 敗戦翌日から引揚げまで

##### (一) 住まいの接収と引越

翌日から、我々外地にいる日本人の立場は逆転した。公会堂の広場には大勢の朝鮮人が集まり、大きな声で何かの歌を歌いながら奇声を上げていた。街には「金九・李承晩万歳」のポスターがいたる所に貼りだされた。そのうちにソ連軍の進駐と共に「金日成万歳」に変わり、敗戦を実感したものだ。我が家では、玉音放送の数日前に父が赤紙召集されていたので、不安な日を過ごしていたが、幸いにも間もなく帰って来たので、ひと

まず安心した。しかし、住まいが中学校の官舎だったためか、比較的早く接収されることになった。転居の際、家財道具の一覧表を提出させられ、目ぼしい物はチェックされ、置いて行くよう指示された。その際、七輪を「コンロ」と書いたので高価なものだと勘違いされたのか、置いていく方に分類されたのには驚いた。

転居指定先は近所のお菓子屋の「いろは堂」(当主は野村さん)の六畳一間だった。そこに我が家の七人のほかに小泉さん一家五人も住むことになって、部屋の真ん中に線こそ引かなかったが、半分ずつ使った。出入りは、うちが窓側だったので、木製の階段を作って中窓から出入りができるようにして、小泉家は障子で仕切られた廊下側から出入りをした。それにしても、押入れもない部屋でよく十二人が暮らせたものだと思う。布団をはじめ衣類その他の生活必需品は、棚を作ったりして置いていた。さらに、箆笥を一棹運んで来たが、寝るのに足が伸ばせないで、台を作ったその上

に乗せ下に足を入れ伸ばすという工夫をしたりして、笑えない苦勞もした。何しろ「いろは堂」には八家族三十二、三人が詰め込まれていた。このような共同生活の中で、家族を支える母の苦勞は食事の支度（米は高くて買えず、もっぱら玉蜀黍を挽いた荒い粉で作った焼きだんご、もしくはすいとんが主食）、ごみの処理、共同で使った便所、風呂の管理等など大変なものだったと思う。余談だが、私は玉蜀黍が嫌いだったが食べざるを得ず、毎日食べているうちに抵抗なく食べられるようになった。人間とはわがままなものだと思う。

## (二) 生活費稼ぎのため職を遍歴

このような状態の中で、先立つのが生活費を稼ぐことだった。中学校は閉鎖になり父は職を失った上、肝心なときに父がいなかったため、預金も下ろしてなかったし、家を明け渡すとき、目ぼしい物をほとんど取り上げられたので、換金する物も少なく、父と私と小学校六年生の妹との生活費稼ぎが始まった。父は農作業の手伝いや知人の左

官の手伝い、妹は朝鮮人の家に子守りや家事手伝いに行った。私は父のつてで、まだ存在していた陸軍の兵事部（陸軍の兵站を扱っていた）で、今で言うアルバイトを始めた。確か一週間くらいだったと思うが、これは楽しい労働だった。直接の仕事は、帳簿整理のようなものだったと記憶しているが、倉庫には久しく見ていなかった砂糖だの小豆だのがあり、甘いぜんざいなどを作って食べたり、飼っていた豚を豚汁にして食べたりと、東の間ではあったが贅沢三昧だった。当時の軍隊には、物資は豊富にあったのだ。そのときに感じたのだが、軍曹ぐらいの人が日本刀で豚を殺そうとして斬りつけたが、ほんと刀が跳ね返って豚の背中にはかすり傷程度。驚いた豚が逃げ回って、その速いこと。何人かで追い回しようやく仕留めたが、日本刀で斬るのには斬り方があるということを知った。さらに、いよいよ軍隊が引き上げることになって、兵事部を閉鎖するときには、軍隊用毛布や軍靴をもらった。持ち帰る際、朝鮮人に見

つからないようにと注意され神経を使ったが、幸いにも無事家にまで持ち帰ることができた。それはささやかながらすべて我が家の食糧に換わっていた。当初、軍隊は一般の日本人が引き揚げてから最後に引き揚げるのだからと言っており、まだ汽車が通っていて、乗れば帰国できたかもしれないにもかかわらず、ほとんどの一般日本人はそのまま残っていた。しかし、結局は軍隊が真っ先に引き揚げさせられ、それも帰国はできずシベリア送りとなったようで、これも負け慣れていない日本人の悲劇だったのだろうが、この後に大変な苦勞が待ち受けていたのだ。敗戦という事態に遭遇した日本は、ほとんどすべての人が苦しむこととなったわけである。兵事部の閉鎖によって仕事を失った私は、遊んでいるわけにはいかないので、すぐに父の知り合いの朝鮮人Rさんの洋服屋で働くことになった。もちろん仕立ての仕事などはできず、見習いとして入ったのだが、初めからミシンを掛ける練習をさせてくれた。Rさんが

一人で洋服の注文仕立てをやっていたので、少しでも早く軽作業を手伝わせようとしたのか、父が早く技術を身につけさせようと頼んだのかは分からないが、「お前はなかなか筋がいいな。ミシンの掛け方がうまい」と褒められたのに気を良くして、一生懸命練習をした。当時は総じて技術者が不足していて、大工、左官、機関車の機関士、洋服仕立て屋などが優遇され、高給を取っていた。我々の住んでいた一廓にも、満州から移って来て掘っ立て小屋を建てて住んでいた大工だったという男性二人も、毎日白米の飯をふんだんに食べていたのを、子供ながらに羨ましく見ていたものだ。父は「敬一！ 人間はやはり腕に技術を持つていないと、まさかのときには駄目だな」と、よく言っていたものだったが、洋服屋への奉公も先行きのわからない状況の中で、父のそうした考えを前提にした勧めだったのかもしれないと、今思っている。

さて、洋服屋の勤めは、昼食を腹いっぱいご馳

走になることができ、だんだん高度な仕事もさせ  
てもらえるようにもなり、毎日毎日楽しみに通っ  
た。そして、ボタン穴のかがり、両ポケットの蓋、  
背広の襟の芯縫い等はもちろん、裁断してもらえ  
ば背広の上着の袖やズボンも縫えるようになった。  
そのころのことだったが、R家には優しいおかみ  
さんと男の子が二人いて、二人とも中学生で一年  
違いだったと思うが、仲が良く私とも同い年くら  
いだったから話もよくしていた。ある日、二人が  
血相を変えて飛び込んで来た。見ると、兄のほう  
が肩から血を流していた。ご主人とおかみさんも  
驚き掛け寄ってわけを聞くと、今しがた中学生の  
一団が共産党の本部を襲って銃撃に遭い、多数の  
死傷者が出たらしく、兄もその際に流れ弾が当た  
ったんだという。理由は分からなかったが、と  
にかく当時の共産党政権に盾ついたのではただで  
は済まない。「大変だ、しばらく店を閉めるから」  
と言われ、即刻帰宅した。勤め始めて六カ月は経  
ったころかと最近まで考えていたが、新緑会（新

義州地区在住引揚者の会）の会報「鴨緑江」を改  
めて読んで、その日が昭和二十年十一月二十三日  
だということが分かり、結局約三カ月しか勤めて  
いなかったのだと理解した。「鴨緑江」によると、  
当日は市内六校の中等校の学生数千人が三班に分  
かれて、道人民委員会保安部、平北共産党本部、  
新義州保安部の三カ所を襲ったが、機銃掃射など  
の実力行使を受けて、現場で殺された者二十四人、  
負傷者三百五十人、逮捕者千人余り、処刑者二百  
人余りであったということだ。R家の兄弟がその  
後どうなったのか分からなかったが、私の復職は  
かなわなかった。

それからは、冬に向かって父と二人で朝鮮人の  
家に薪割りに行った。斧と鋸を持って、山から切  
り出した松丸太が積み重なっている家を見つけて  
は、一山いくらで請負い、薪にして家の軒下に積  
み上げて一仕事の終わりとなり、また次の家を探  
すという仕事の繰り返しであった。当時、北朝鮮  
の山は樹木が豊富で、ちよつとした家では寒い冬

を過ごすために切り出された松丸太が積み上げてあり、薪割りの仕事は多かった。

秋から冬にかけては、こうした仕事をしたのは覚えていたが、あの寒い冬を食べるのが精いっぱいだった我が家では、暖房はどうやって取っていたのか、さっぱり覚えていない。

しかも、冬がとても寒かったという記憶もないのは、生き抜くために夢中だったからか、羅津という朝鮮の最も寒い所を経たせいなのか、とにかく食べる物の苦勞の記憶はあるが、寒くて大変だったという記憶はあまりないのが不思議だ。

春になってからは、薪割りの仕事も無くなり、その後は鋳物工場の仕事だった。どういふ筋からの紹介だったか思い出せないが、鋳物工場は飛行場に近い所にあった。まだ日本の飛行場が残っていたところで、仕事は日本の飛行機を壊して、そのジュラルミンを溶かして鍋・釜を作る仕事だった。私は上半身裸になって、小さな溶鉱炉から熔けたジュラルミンを柄杓にくんで、砂で作った型の中

に注ぎ込んだ。結構重かったが、つまずいたら大変と慎重に運んだものだった。もつともそのときは、滴が飛んだら危ないと上半身にシャツを着させられた。それで一日いくらもらったか思い出せないが、特に事故もなく日本軍の飛行機が無くなったからか、短期間でお払い箱となったように記憶している。暑くて汗びっしょりになり、また真っ黒になって働き、当時は鋳物工場というのは大変な仕事だと思ったが、それでも今考えると良い経験をしたと思っている。

次の仕事は、妹二人と煙草工場で煙草巻きや箱詰めをやったことだ。確か、煙草四本くらいの長さの手巻き機を各自持って、その上に煙草用の薄い紙を敷き、煙草の葉っぱ（といってもほとんど緑色の何か分からない怪しげな葉っぱで、本物の茶色の葉っぱをわずかに混ぜる程度のようにだった）を適量並べ、両手で絞りながらくると巻き四本分がでさ上がり。これを、一本分の長さに切れるように隙間の開いた木箱に数十本詰め、糸鋸

をその隙間に合わせて切り下ろして四等分し、紙の箱に十本ないしは二十本詰めて出来上がりとなる。これが北朝鮮政府の直営だったのか、あるいは民間の会社だったのかは、当時の私にはあまり関心がなく不明だが、とにかく戦後の物資不足の時代、煙を吹かせるだけで喫煙家には良かったのかもしれない。煙草といえば、当時のソ連兵はちよūd煙草の紙の薄さの辞書の紙を千切つて、その上にズボンのポケットから煙草の葉っぱをつまみ出して並べ、器用にくるっと巻いては舌で紙の端を舐め、唾をつけて張り合わせるといふ手製の煙草を吸っていたのをよく見かけた。しかしその葉っぱの色は、引き揚げて来て直後に見たアメリカ製のタバコの鮮やかな茶色には、ほど遠かったという記憶がある。兄妹三人で通つた煙草工場ではどのくらい働いたか、これも残念ながら記憶がない。

以上のようにして、家族皆でいろいろなことをして食費を稼いだ。当時は皆必死の思いで働いた

が、帰国後、親戚の家に農作業の手伝いに行ったり、兄弟姉妹どんなきにも仲良く助け合い、現在も皆健康でいられるのも、このときの苦勞の賜物で、良い経験であったと思っている。

### (三) ソ連兵についての感想

ソ連軍が進駐して来たのは、確か八月の下旬だったと思うが、頭を坊主狩りにした兵隊は刑務所に入っていた囚人で、第一線部隊だと言われた。確かに凶暴で、彼らは時計店に押し入っては腕時計や宝石を奪つたり、日本人の家に押し入っては金品を強奪したり、婦女子に暴行したりしていた。敗戦国の我々は、子供ながらに悔しさと恐れを感じていた。実際、隣に住んでいたすらりとして美人だった川島さんのお姉さんは、髪を切って男装をしていたし、腕に腕時計をいくつもはめ、耳に当てる「コチ、コチ」鳴るのを確かめて「ハラシヨー！ ハラシヨー！」と得意そうにしている兵隊を見掛けた。そうしたある日、朝鮮人らしい男性に暴行を加

えている酔ったソ連兵を、衆人環視の中で、同じソ連軍の将校のような綺麗な軍服を着た兵士が銃で撃つたのを見た。びっくりして、関わりにならないよう皆はそーっと散り散りになったが、それが有名な「ゲ・ペ・ウ」だということが分かったのは、後日のことだった。そのころからソ連兵も入れ替わったのか、または規律が厳しくなったのか、あまり強盗、暴行などの話は聞かなくなった。

私とソ連兵との接点は、日本人世話会を通じて割り当てられるソ連軍への勤労奉仕が最初だった。もちろん無償労働の提供だが、頻繁に要請があった、一度に数十人から百人ぐらい人数だったと思うが、我が家の出番のときには、ほとんど私が出た。仕事の内容として私が経験したのは、ほとんど飛行場の整備。といっても草取りが主だったが、あとは食堂の清掃など。ここで時々食わせてくれる黒パンが、残念ながら空きっ腹にはとてもおいしく、ささやかな楽しみであった。

ところで、ソ連軍の勤労奉仕の中で、いまだに

忘れられない恐ろしかった記憶として残っているのは、脅しであったとは思うが、銃で二度狙われたことである。一度目は、飛行場に入ったときのこと。昼休みにほとんどの人が草っ原で体を横にして休んでいたが、私は友人と二人で、当時まだ残っていた使えない日本軍の練習機に寄りかかって、話をしながら持っていた鎌で、何気なく布でできていた尾翼を突き刺していた。そのとき、何か遠くで大声がしたと思ったら、「パーン」という銃声と共に、耳元近くで「ヒューン」という音が聞こえた。びっくりして銃声の方を見ると、ソ連兵がこちらを見て怒鳴りながら銃を構えているではないか。近くの大人たちも、「早くこっちに來て寝転べ」と言っている。慌てて近くの草っ原に寝そべったが、一瞬生きた心地がしなかった。ソ連兵は何か大声で怒鳴っていたが、それ以上追っては来なかったもので、ホッと胸をなでおろしたものだ。二度目は町なかの塀で囲まれた広い庭のあるソ連軍将校の自宅（もちろん日本人から

接収したものが)に行つたときのことだつた。庭の掃除をしていて、裏の方に回つた際、たまたま大きな電気がついて明るい部屋の中が見えたので、西洋人の生活様式はどんなものかと物珍しく、背伸びをして中を覗いていたら、折悪しく住人の将校が回つて来て、大声をあげながら腰の拳銃に手をやり、近づいて来た。びっくりして「ニエーット、ニエーット」と夢中で手を振り、後ずさりしながら逃げた。至近距離だし、撃たれたらおしまいだと生きた心地もなかったが、やはりこれも脅しだったのか、それ以上は追つて来なかった。むしろ秩序回復後の日常は、粗末な軍装をした兵士たちが街中で手まねきで話しかけてきたり、ひまわりの種子(炒つたもので殻を割って食べる)をポケットから出して分けてくれたり、近くの将校官舎にいたユーラという色白の可愛い子とは友達になつて遊んだり、親しみを抱くくらいだつた。

#### 四 待ちに待った帰国

このころ、我々が入つていた「いろは堂」には前述のように八世帯が住んでいたが、その中の大内さんという一家に綺麗な三姉妹がいた。長女の綾子さんは、私より数歳年上の気さくなお姉さんだったが、兄姉のいない私は彼女を「綾ちゃん」と呼んで慕い、彼女らと毎晩のように「いろは堂」内の広い炊事場で帰れる日の話などをしながら、帰国の思いを歌に託して一つの歌を歌っていた。それは「ラバウル小唄」の替え歌で、「さらば新義州よ、また来るまでは、しばし別れの涙がにじむ……」という歌詞だった。今でも「ラバウル小唄」を歌うと、何か当時の切なさを感じる。このように、敗戦後二度目の夏がやってきたころには、我々の帰国への思いはますます募っていた。そして、昭和二十一年九月二十七日、我が家はようやく日本に帰国できることになり、夕方駅近くの大国屋の倉庫に集結した。翌朝は天気も良く、総勢百人くらい、新義州駅を客車に乗せられて出発した。しかし、平壤からは有蓋貨車、沙里院か

らは無蓋貨車に乗り換えさせられ、地方線に入り鶴峴駅で降ろされたときにはもう暗くなっていた。ここからは歩くほかないということ。取りあえず駅頭で野宿することになった。そこで、各戸飯盒炊さんをして夕食を済ませた。毛布くらいは持参していたのか、九月の終わりとはいえ北朝鮮の夜は夜露で冷え込んだと思うが、寒かったという記憶はない。

翌日は、ただひたすら山野の細い道を歩いた。道を選んだのだと思うが、あまり人には出会わなかった。日が暮れて、前方にポツポツと部落の灯りが見える所まで来たときのこと、道の端に人の気配、顔も定かではなかったが、オモニと思わしきその女性が、歩いている我々に一つずつ手渡ししてくれた物。それはリングゴだった。我が家でも、一番端を歩いていた妹がもらった。顔も分からず、お互いに見も知らない相手に、その地の特産品とはいえ大きな籠に入れたリングゴをただくれるということに、皆感激していた。日本人妻だったのか、

戦前よほど日本人に恩を受けた人なのか、はたまた単に気の毒にという慈善の気持ちだったのかは知るべくもないが、何の得もないむしろ朝鮮人仲間知れたら、ひんしゆくを買うような行為をしてくれたというその暖かい気持ちは、「人間の善意」として、今でも思い出すたびに私の心を揺さぶるのだ。

その後間もなく朝鮮人の部落に着き、どう交渉したのか、我々は各家に分宿させてもらった。私たちが泊めてもらったのは、大きな土間のある家だった。野宿のあとの夜の安らぎは格別だったはずだが、他人のそれも朝鮮人の家という緊張感からか、温もりを得たという以外あまり覚えていない。

翌日は、いよいよ三十八度線を越えて南朝鮮に入れるということで、皆の緊張感は高まった。昼間歩いてソ連軍に見つかると連れ戻されるとのこと、夜になってから歩き始めることになった。

三十八度線近くに来ると、道路のすぐ脇の小高

い所にソ連軍の基地があり、話し声が出て、煙草をふかしている火影がいくつも見える。その下を、声を上げるなどばかり静々と我々は通り過ぎた。それこそ赤ん坊の泣き声も、そのときは聞こえなかった。もちろん、ソ連兵は気が付いていながら見過ごしてくれたのかとも思うが、そのときの我々は気が気でなかった。右手を見ると、山の端すれすれに赤い上弦の三日月が浮かんでいたのを、何となく不気味な不吉な予感を持って眺めたのを記憶している。

当時、三十八度線の両側には帯状の空白地帯があったらしいが、そこに差し掛かったときだった。後方で銃声が轟き、一瞬皆が道路の両側に散らばって伏せた。しかし、次の瞬間今度は「若い男は後方に集まれ、後は皆前方に走れ」と指示が飛び、我々は皆不安に駆られながら必死に走った。その後とくに被害もなく、無事三十八度線を南に越えることができた。

後で聞いたが、その無法地帯には山賊が出るの

だということであった。それにしても、当時はあまり感心をもたずにいたが、ここまで無事に百人からの引揚者をまとめて導いて下さった責任者の方に、今さらながら感謝したい。

さて、落ち着いたのは青丹という町で、大きな倉庫の中に入れられた。翌日トラックが来て、我々は開城のテント村に収容された。

テント村での生活は二週間前後に及んだが、南に來たという安心感があったものの、空腹と戦う毎日であった。一日二食、その内容といったら、アメリカの家畜用食糧の玉蜀黍の挽き割りを、ドラム缶を半分に切った釜で炊き込み、お粥状になったところにわずかな塩とコンビーフの缶詰を四、五缶まぜたもので、これを一食に小さな茶飲み茶碗一杯、栄養失調で毎日のように餓死者が出ていた。テント村の鉄条網の外には、朝鮮人がいろいろな物を売りに来ていたが、お金のある人たちは（お金の持ち出しは制限されていたが、中には着物の襟に縫い付けたり、胴巻きに隠したりという

いろ工夫をして持ち出した人もいた、結構おいしそうな物を買って食べていたようだ。我が家をはじめ大部分の人たちは金もなく、せいぜい空になった弁当箱などを大根の葉っぱと取り替え、生のままかじったくらいで、ただ寝転んでいるしかなかった。幸い私は、父がどう働きかけてくれたか、しばらくして食事係に配属され、それからは役得ということか、何とか空腹を逃れることができた。常に父は長男の私のことを考えてくれたたな、といろんなことを思い出すたびに感謝し、果たしてそれらに対して父の生前に十分に報いたか、反省している。

このように収容所生活が長引いたのは、韓国内における鉄道ストのためというのを聞いたが、ほかの時期の引揚者も皆留め置かれたらしいので、真実は不明だ。

やがて貨物列車に乗せられ、京城經由で仁川に到着、その日のうちの日本から迎えに来てくれた「高栄丸」という貨物船に乗った。遂に、待ちに

待った日本に確実に帰れるんだと安心したその喜びは、いまだに忘れられない。その晩に出されたうどんの煮込みは単なる塩味だったが、そのおいしかったことを忘れられず、いまだに私の好物はうどんである。

その翌朝、確か十月十九日だと思うが、我々は日本晴れの佐世保湾に入港した。湾の入口には両側から松の緑が茂った半島が突き出し、天然の良港というのが分かり、波は静かで素晴らしい景色が広がっていた。進むうちに、沈められて赤錆びた軍艦らしきものが見え、わずかに敗戦日本を思わせたが、錨を下ろした船の下には、サツマイモを山と積んだだるま船が横付けされ、我々の食欲をかき立てた。夜食には、そのサツマイモと餅高粱の雑炊が出され、おいしさに舌鼓を打ったものだった。

その後順調に南風崎港に上陸し、DDTを頭から撒かれたり予防注射を受けたりして、一泊後それぞれの故郷に分散帰国した。私たち家族は、幸

いなことに一人も欠けることなく、無事父の故郷に帰り着くことができ、しかも案じていてくれた親戚一同の暖かい援助の下、親戚の農家の納屋を改造した所ではあったが、何とか落ち着き新生活をスタートしたのであった。

#### 八 帰国後の生活

間もなく父の就職も決まり（水戸市立女学校、現水戸第三高等学校）、私も水戸中学校（現水戸第一高等学校）の二年に編入された。結局これにより定年退職するまで、通常の人より一年遅れのまま過ごすことになったことが、唯一の残念なことであった。高校卒業後、地元の常陽銀行に就職、定年まで勤め上げた。その後、縁あって地元の交通会社である茨城交通の関連会社の専務など、第二、第三の勤めの後、七十二歳でリタイヤしてからはパソコン、有機野菜作り、弓道、ゴルフ、麻雀、小旅行などをやりながら、五人の子供と九人の孫に囲まれ、やはり満州鞍山から引き揚げて来た妻と二人、毎日楽しく過ごしている。

最後になってしまったが、最も苦勞をした父母は、昭和四十三年から私らの家族と一緒に住み始め、父は聾学校長まで勤め上げ、七十四歳で世を去った。母は朝鮮での苦勞、さらに引揚げ後の慣れない農作業などでの無理が祟ったのか、六十二歳の若さで亡くなったのが残念であった。引揚げ後生まれた一番下の弟は兄弟皆に可愛がられたが、不幸にも五十二歳で病没し、可哀想なことをした。しかし、その他の朝鮮から苦勞を共にしてきた弟妹は、皆元気でそれぞれに幸せな家庭を築き、今も仲良く過ごしている。上の妹は小学校の教師と結婚、次妹は自ら教師となり、二人共父の志を継いだ形となっている。末妹は独身時代、日立製作所工場長秘書をやった。弟は引揚げ後直ちに小学校一年に編入させてもらい、私のように遅れることなく学業を終え、東大を経て通産省に入り、退官後はノーベル賞の田中耕一さんが受賞の時期、島津製作所の専務でその輝かしい場面に関わっている。

こうして等しく苦勞をしてきた兄弟が、今それなりに平穩な毎日が送れるのも、古来「苦は楽の種」という諺にもあるように、戦後のあの苦勞を乗り越えてきた結果だと、しみじみ思うのである。そして、平和というものの尊さ、有り難さを皆が考え、それが続くことを願うものである。

## 我が青春の北朝鮮

茨城県 田所喜美

### 一 出生から終戦まで

#### (一) 生いたち

私は、昭和三（一九二八）年の旧暦一月二十四日に、茨城県土浦市の在の大字毛野の母の遠縁の産婆の家で生まれた。新暦では、恐らく二月末か三月の初めであろうか。役場への出生届は三月二十七日生まれとなっているが、本当の誕生日ではない。高島易断所総本部編纂の「昭和三年家庭暦」を見れば、正しい誕生日が分かるのだが、いまだその機会がない。

母の実家は旧士族の出自であり、父は旧平民の出なので、八十年前の茨城の片田舎では「釣り合わぬは不縁のもと」との諺どおりに、二人の結婚は認められるはずがなかった。私を身籠っていた母は、親や親戚から墮胎を強要されていたが、た